

名越 実 氏 逝く

2014/10/27 藤川昌寛

広島山岳会メンバーが正月合宿を終了し、単独行の名越実さんと新穂高温泉ロープウェイ駐車場で待ち合わせていた。帰って来ない。連絡が全然ないし、連絡つけようがない。

【遭難事故報告書】より -----

名越実氏の山行計画

単独で12月29日に上高地から入山し、横尾尾根経由で槍ヶ岳に登頂後、新穂高温泉に1月2日に下山する計画。帰路については、合宿隊と合流し広島まで同行予定。

広島山岳会の冬合宿定置隊（4名、槍平より槍ヶ岳往復を悪天のため断念）は12月31日に下山。縦走隊（3名、上高地より入山、蝶ヶ岳、東鎌経由で槍ヶ岳登頂の予定だったが、エスケープルートにて燕岳より下山）は1月1日に下山後、定置隊と合流した。その日は名越実氏と連絡取れず。定置隊は、東海北陸道「ひるがの高原SA」に移動し宿泊。縦走隊は沢渡駐車場に宿泊。縦走隊は予備日である翌2日も、沢渡で名越氏の下山連絡を待った。

1月2日、縦走隊は12時、広島山岳会長、理事長と警察への捜索依頼を相談し、13時過ぎ長野県警・松本署に捜索を提出した。

遺体発見

第三次捜索は、会員内外24名6パーティ。

6/6 9時過ぎ、槍沢側ルンゼを捜索していたパーティがルンゼ下部斜面に赤い物を目視、第一報を入れる。それから手袋、ストック、水筒、マットなど、次々に名越氏の遺留品発見。横尾谷側を捜索中の3パーティは横尾に戻り、順次槍沢ロッジに向かった。槍沢側にいた3パーティ9名が集結して周辺をローラー捜索した結果、第一報の約1時間後の10時20分に名越氏の遺体発見。

発見場所は、槍沢ロッジのほぼ正面のルンゼ下部斜面、高度1991m。ルンゼ押し出しの雪渓近くの雪のないブッシュ帯で、遺体と前後してザックも見つかった。現地本部は警察に連絡、県警へりは天候のわずかな回復をつき隊員2名を現場に降下させたが、悪天候でへり飛ばず、収容は翌日となった。

6/7 早朝、陸路入山の警察隊員 4 名を含め捜索隊全員が 7 時に槍沢ロッジへ集結し、現場より搬出用ボートに遺体と遺留品を載せ、人力で雪渓、ブッシュ帯を降ろし、80mのハイラインで沢を渡し、槍沢ロッジまで搬出した。槍沢ロッジからは警察隊の手によって横尾まで搬出、それからは警察車両で松本署へ運ばれ、名越 實氏と確認された。

遭難の原因

① 名越氏の行動：

遺留品のメモは「12/29 上高地発 8:10 - 9:50 明神 - 11:30 徳沢 - 13:30 横尾 - 取付きラッセル - 15:30 - コル トレースなし」と記録。30日以降は記帳ないが、食料の消費量、残量、ごみ、テントの使用の有無の点検結果、名越氏は12/29 上高地より横尾に入山し、横尾尾根末端取付きから尾根上のコルまでラッセルトレースした後、横尾冬季小屋に戻り宿泊(小屋にいた登山者と会っている)。12/30 横尾尾根末端から取付き、尾根上でテント泊。12/31 尾根上を登行あるいは下降中の比較的朝早い時間帯(天候急変)に事故遭遇したものと思われる(テルモス内の飲料残量は8割程度)。

② 事故発生地点&原因：

遺体発見時はアイゼンと共にわかんを装着した状態であった。12/31 早朝、P4より下部のテント泊した地点から出発して事故発生地点に到着したか、あるいは前日にP5を超えた地点でテント泊した後、悪天候のため(12/31の天候は強風の吹雪状態で行動にはかなり困難が伴う状況であった。他のパーティからの情報)尾根上を引き返すため下降中に事故発生地点に到着したかは定かでないが、その地点で槍沢側に発生していた雪庇を踏み抜いたか、あるいはバランスを崩して転落したか。

遺体発見地点の上部は横尾尾根まで急峻なブッシュ交じりのルンゼ状の岸壁となっており、尾根上の標高は約2340m、遺体発見地点は1991mである。尾根から約350mルンゼ状の岸壁を滑落し、ルンゼ下部の緩傾斜帯で止まったと思われる。検視の結果「多発外傷」と診断され、ザックは発見場所が遺体の下部約40mと比較的近くであることから、停止後に本人は行動していないと推察され、滑落中に全身を強打、骨折(火葬後の骨に大腿部、頭部に数カ所骨折の痕跡あり)。

(広島山岳会名越實氏遭難対策現地本部)

遭難記事は全国版の新聞に写真入りで掲載された。名越さんは、正月には暮れから北アルプスに（主に単独）行くのが毎年の恒例行事だった。

名越さんは、下記の経歴からも岩登りと登山の達人で、無駄のない体格、岩登りの稀有な才能の持ち主だった。いつも柔和で俗世間から一步飛び出た雰囲気をもっていた、奥様の最後のご挨拶は、「いまだもって、ひょっこりかえって来るような気がする」の言葉だった。

略 歴

1948年8月広島県八千代町で生まれる。

高校より登山を始める。

1970年広島山岳会に入会（22歳）。

無雪期の縦走から厳冬期の岸壁登攀、ヒマラヤ遠征までを実践するオールラウンドな登山家へと育つ。

1975年の冬季韓国より海外の登山・踏査・旅行を始め、これまで数多くの海外遠征に出かける。

海外の主な登山等経歴（◎は：世界初）

1975～1976年12月、2月 韓国、雪岳山、土曜城氷瀑登攀

1977年4～7月 ◎インドヒマラヤ、バルナージ峰（6290m）初登頂

1981年5～8月 ◎インドヒマラヤ、クン峰西壁（7077m）初登攀

1984年6～8月 ◎パキスタンカラコルム、ボイオハグール・ドウアンアシール（ウルタル）I峰（7329m）初登頂

1988年2～6月 ○チベットヒマラヤ、チョモランマ（エベレスト）峰登山（8300mまで＝無酸素）

1993年6～9月 ◎インドカラコルム、アクタシ峰（7016m）初登頂（南西壁）

1998年6～8月 ◎カナダ、バフィン島、フリーガII峰北壁（60m×16p）初登攀

2000年10月 ブータン王国、ドゥック山城踏査（単独）

2005年4～5月 ネパールヒマラヤ、テンカンポチェ峰北東岩稜登攀（5100mまで＝2名カプセル）

2007年9～10月 ◎中国、四川省、チョンライ山系、霸王山（5551m）初登頂（3名アルパイン）

◎ 中国、四川省、チョンライ山系、石筍山^{セキジュン}初登頂（4名＝アルパイン）

2010年3月 台湾、玉山(3952m)登頂
10月 ネパール、ポカラトレッキング
2011年 ブータン訪問、ポブジカトのトレッキング
ネパール、エベレスト街道トレッキング(ガイド)
2012年10~11月 ネパール、アンプーI峰
2013年10月 ネパール、アンナプルナ内院トレッキング(ガイド)

国内の主な登山等経歴

<積雪期>

北鎌尾根一槍一穂高縦走、黒部一剣岳八ツ峰縦走、剣岳小窓尾根一チンネ登攀、
剣岳剣尾根縦走、剣岳北方稜縦走、赤沢岳西壁登攀、穂高岳屏風岩単独登攀、
甲斐駒ヶ岳黄連谷奥壁登攀、富士山、大山北壁登攀、朝日岳一後立山一槍ヶ岳一
西穂高岳全山縦走、など

<無雪期>

剣岳チンネ、八ツ峰、穂高岳屏風岩、滝谷、前穂高東壁、奥鐘西壁、唐沢岳幕岩、
赤沢岳西壁、^{しゃくじょう}錫杖岳等の岸壁登攀、南アルプス、北アルプス、中央アルプスの
縦走・登山、富士山、北海道、関東、近畿、中国、四国、九州の多くの山の登攀・
登山・沢登りなど

バスツアー・同行ガイド等

県内、中国、四国、九州の多くの山、富士山、月山、等

所 属

広島山岳会、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、広島ブータン協会、
関西山岳ガイド協会、広島登山研究所、深呼吸クラブ、クライムハイ、等

2011年山岳ガイド認定を取得し、「山倶楽部・エコトレビスタ※」を主宰。クラ
イミングパートナーとして登山・ツアーの企画、同行を始める。

(※エコロジー(自然との共生)なトレッキング(山歩き)をビスターリ(ゆっくり)歩く、安全
で安心な楽しい会員制クラブとの意味。本人による造語。)

山に対する姿勢：クリーンでシンプルなアルパインクライマーでありたい。

2013年末 永眠 享年65歳。

ここで豊田和司さんの詩を紹介する

詩壇賞受賞

詩人の旅立ち

呉市 豊田 和司

通勤電車でいつも一緒のその女子高生は
朝の光の中で聖母のようなまなざしを
教科書に落としていたりもするが
おおむね降りる駅が迫っても熟睡しており
見かねた私が肩を軽くつつくと
気がついて恥ずかしそうに笑って会釈する

私が
ネクタイをはずしながら妻の小言を聞くとき
時間に追われての昼メシの牛丼をかつこむとき
窓外の樹に見とれて会社朝礼に参加するとき
私の肩をつついて教えてくれるのは誰だろう
さあ次がおまへの降りるべき駅なのだよと・・・

尊敬するする登山家が冬山で消息を絶った

ひょうひょう
飄々としていつも冗談ばかり言っていた

ある時私が黒沢明の「どですかでん」の浮浪者親子は
辻潤・まこと親子がモデルではないかと言うと
ほうよ、詩人の山本太郎が確かどっかに書いとった
(なんでそんなことまでご存じだったのですか)

詩人のふりすらしてなかったが
まぎれもなく一人の詩人だった
詩人は旅立った
おそらく
だれかに肩をつつかれて
恥ずかしそうに笑いながら・・・

この詩壇賞は中国新聞8月18日読者文芸欄中国詩壇に発表された。

詩壇賞受賞 写真入りで、豊田和司さんの受賞の言葉

「6月、日本屈指のクライマー名越実氏のご遺体が、不明から約半年ぶりに発見された。65歳という早すぎる死。しかし、思い通りの生を全うされたことを私は祝福したい。名越さん、はるかな山の頂から私たちを見守ってください。

その、極上の、^{がんしゅう}含羞のほほ笑みで・・・」

選者は野木京子氏 選者の評は、「選者も詩人山本太郎の詩や著作が好きでよく読んだ。辻まことを山本太郎は、山や人生全般の最も良き先輩と呼び敬愛した。2人とも山に関わる文をかいた。登山家は死を意識し生きる点で詩人と同じ。詩人は詩を書く人の意味でなく最高の尊称。恥ずかしそうな笑顔の向こうに永遠がみえる。」

豊田和司さんは広島県山岳連盟事務局長を務めている。もう十数年来の山仲間だ。名越実氏を詩人とみること、県山岳連盟始まって以来のこと。やはり豊田和司さんだからこそ言い得ることだ。豊田さんは広島県詩人協会に属しておられ、詩作は勿論、文筆活動に秀でておられる。 了